

第124回九州医師会連合会総会



常任理事 涌波 淳子



第124回九州医師会総会

日時：令和6年11月16日（土）12：50～13：40
場所：ホテル日航熊本

- 1) 開会の辞
- 2) 国歌斉唱
- 3) 黙 禱
- 4) 九州医師会連合会長挨拶
- 5) 来賓祝辞
- 6) 祝電披露
- 7) 宣言・決議
- 8) 次回開催担当県医師会会長挨拶
- 9) 閉会の辞

去る11月16日（土）、ホテル日航熊本にて標記総会・医学会が開催され、九州医師会連合会総意のもと、宣言・決議（案）が採択されたので、その概要を報告する。

1. 開会の辞

坂本不出夫委員より開会が宣言された。

2. 国歌斉唱

全員が起立し、国家斉唱が行われた。

3. 黙 禱

昨年の長崎での総会以降、九州ブロックにおいてご逝去された228名の会員に対し、生前地域医療に尽くされたご功績をたたえ、ご冥福をお祈りして、黙禱が捧げられた。

4. 挨拶

九州医師会連合会長 福田 稔

熊本は医学教育の長い歴史を持つ地域である。1756年に細川重賢公が「再春館」を創設し、医師の養成を開始した。その後、1870年に細川護久が設立した古城医学校では、オランダ人軍医マンスフェルトを招聘し132名の学生を指導し、北里柴三郎や緒方正規、濱田玄達といった日本医学を担う人物を輩出している。また、熊本大学医学部の前身「私立熊本医学校」も明治29年に設立されている。こうした背景を踏まえ、熊本での医学会開催は大変意義深い。この後の講演や、明日の分科会など、実りある会になることを祈念する。

5. 来賓祝辞

日本医師会長 松本吉郎

日本医師会の会員数が過去最大の17万7,000名に達した。先生方の協力に感謝申し上げる。今後、現場の意見を国や省庁に届ける上でも会員の数と質の両面を高めていくことが重要である。また、衆議院選挙で与党が過半数割れをしたが、我々の方針に変わりはない。与党との連携を続けつつ、時には野党とも意見交換を進めていく考えである。来年7月の参議院選挙に向け、釜范敏副会長を全国区候補として更なる支援の拡充をお願いしたい。また医療介護団体とのより一層の連携強化を図り、病院や診療所の経営問題を国に訴え、課題解決を目指していきたい。是非、日医と共に地域医師会が一体となり、叱咤激励、意見を頂きながら取り組んで参りたい。

熊本県知事 木村敬（代読：副知事 竹内信義）

近年、人口減少や高齢化が進む中、新型コロナウイルス感染症対応など、医療ニーズの質・量も変化している。さらに、元日の能登半島地震や9月の豪雨など災害が頻発する中で、多くの国民が安心して暮らすことが出来ているのは、地域医療を支える医師会の尽力があり改めて感謝申し上げます。今回の学会が各地域にお

ける一層の医療体制向上に繋がることを強く期待している。

熊本市長 大西一史

本市は平成28年の熊本地震で甚大な被害を受け、特に医師会の先生方には医療分野で多大な支援をいただいたことに、厚く御礼申し上げます。本市は、今年度策定した総合計画において「市民生活を守る強くしなやかなまち」をビジョンに掲げ、休日夜間急患センター等の初期救急体制の整備や災害時医療体制の確立、在宅医療の推進に注力していく。今後も関係機関等と連携し、医療提供体制の確保および充実に取り組んで参るので、なお一層の力添えをお願いしたい。

6. 祝電披露

自見はなこ参議院議員が直接来場されたため、祝電披露に切り替えて挨拶があった。

医学の源流の一つともいえる熊本の地で本総会・医学会が開催されることを嬉しく思う。また九州各地で地域医療を支え続けている先生方にも改めて感謝申し上げます。与党が議席を失い、社会保障を掌る議員が大変少なくなる中、かつ少数与党という局面の中で、様々な課題をどう打破していくか目下の課題である。また、いわゆる103万円の話もあり、地方財源の縮小や社会保障への影響が危惧される。様々な局面を加味した上で私達が目指すべきは、分厚い中間層、そして労働者が適切な住民サービスが受けられる地域社会だと思う。さらに、来年の参議院選挙は大激戦になることは間違いない。釜范敏先生の挑戦を支援し、夏の陣に向けて頑張っていきたい。

7. 宣言・決議

総会の議長は、会則第18条に基づき九州医師会連合会長が務め、宣言・決議（案）が提案され、満場一致で採択された。また、宣言・決議の送付先については、九州医師会連合会長に一任することが確認された。（次ページ参照）

8. 次回開催担当県医師会長挨拶

蓮澤浩明福岡県医師会長より、来年の総会・医学会は令和7年11月29日（土）にホテル日航福岡で開催し、分科会・記念行事は翌30日（日）に県内各地で予定されるとの案内があった。

※報告書の詳細につきましてはホームページをご参照下さい。
<https://www.okinawa.med.or.jp/medical/kaihou/houkoku/202303-2/>



9. 閉会の辞

水足秀一郎委員より閉会が宣言された。

宣 言

今年1月の能登半島地震に続き、8月には宮崎でマグニチュード7.1の地震が発生し今回初めて南海トラフ地震臨時情報が発出された。九州各県医師会は今後も予想される様々な災害の発生に備え、更なる協力体制の構築が必要である。

また、地域医療構想も団塊の世代が75歳以上の後期高齢となる2025年を来年に控え2040年に向けて、新たな地域医療構想の検討が始まっている。今後、持続可能な地域医療提供体制を構築するうえで、我が国では物価高騰、人件費高騰などの諸問題を抱え、そのコスト増を診療報酬・介護報酬制度に柔軟に反映させる体制づくりが喫緊の課題である。

加えて、マイナ保険証などの国が進める医療DXについては、医療現場の声に耳を傾け、国民の不安を払拭し、国民と医療機関双方にとって価値のあるものにならなければならない。

更に、2019年に発生した新型コロナウイルス感染症は、2023年5月に季節性インフルエンザと同等の5類感染症に引き下げられ、国民の生活もコロナ禍前に戻つつある。一方で、感染者数は減少傾向にあるものの未だ終息のきざしは見えないために医療従事者への負担は大きく、引き続き、医療機関への支援の継続が必要である。

少子超高齢社会を迎え、国は医療と介護の人材確保は勿論のこと、患者さんが安心して医療機関を受診できるフリーアクセスを堅守し、全ての人の生活を支える社会保障制度を充実させる必要がある。

さらに引き続き、看護師、准看護師の養成に力を注ぎ、医師の働き方改革による地域医療への影響を注視し適切な対応をとることが不可欠である。

我々、九州医師会連合会は多岐にわたる課題を克服し、医療の専門家の団体として日本医師会とともに一致団結し取り組んでいくことをここに宣言する。

令和6年11月16日

第124回九州医師会連合会総会

決 議

我々九州医師会連合会は、政府に対して、次の事項を強く要求する。

- 一、国民皆保険制度の堅持
- 一、社会保障制度の維持・充実のための財源の確保
- 一、フリーアクセスを阻害する「かかりつけ医」制度化の阻止
- 一、災害時における医療提供体制の確保
- 一、看護師、准看護師の継続的な養成
- 一、医師の働き方改革による地域医療の課題解決
- 一、地域の実情に合わせた地域医療構想の推進
- 一、新興感染症に対応する医療体制の確保
- 一、医療DXの推進

以上、決議する。

令和6年11月16日

第124回九州医師会連合会総会



印象記

常任理事 涌波 淳子

令和6年11月16日ホテル日航熊本にて第124回九州医師会総会が開催された。坂本不出夫熊本県医師会副会長による開会の辞に続き、国歌斉唱があり、前回の長崎県での開催後、物故会員となられた228名の会員のための黙とうが捧げられた。九州医師会連合会会長福田稔熊本県医師会会長のご挨拶の中で、「1756年に当時の領主細川重賢が、現在の熊本市に再春館医学所を作り、士農工商という身分に限らず一般庶民にも門戸を開き、外科、内科、児科(小児科)など各科にわたって医学を学ぶ場を作ったのが始まりで、1872年には古城医学所となり、そこから北里柴三郎などその後の日本の医学を牽引された132名の卒業生が排出されていること」等の歴史が紹介され、来賓祝辞の松本吉郎日本医師会会長は、医師会会員数が17万7千人を突破し1年間に2,000人の増加となったのは20年ぶりであること、その数と質の両方を高めていくことが大切であると語られた。多くの先達の歴史の上に今の私たちの医学医療がなりたってきたこと、困難な時代であっても数と質、知恵、協力によって未来の医学医療につなげていく責務を私たちが担っている事をしみじみと感じた。自見はな子参議院議員の挨拶では、103万円の壁の話題から非課税世帯が増えることでの税収の減は、地方自治の税収減となり、検診や福祉介護の予算が厳しくなったり、農政、国交、厚労省の予算にも響いてくるということが説明され、政策には光と影があることを感じた。その後、宣言・決議文が熊本県医師会金澤知徳副会長によって力強く読み上げられ、次回開催県の福岡県蓮澤浩明医師会会長から次回は令和7年11月29日、30日にホテル日航福岡にて開催されることが紹介され、第124回総会は無事終了した。

さて、前回の熊本出張時に熊本城の見学に行った。2016年の熊本地震での崩壊からの復興は、2019年に火災で焼失した首里城の復興と重なった。日ごろ何気なくみていた建物が失って初めて、それが県民の誇りであり心の柱となっていた事に気づく。本当に大切な物はそんな感じなのかもしれない。復興へのプロジェクトは熊本城400年、首里城約600年の歴史の振り返りであり、県民の様々な困難に立ち向かっていく力の象徴である。過去と未来をつなぐ「今」の「命を守り治し支える医療」の実現に向けて自分たちの役割をしっかりと果たしていきたいと感じた。

